

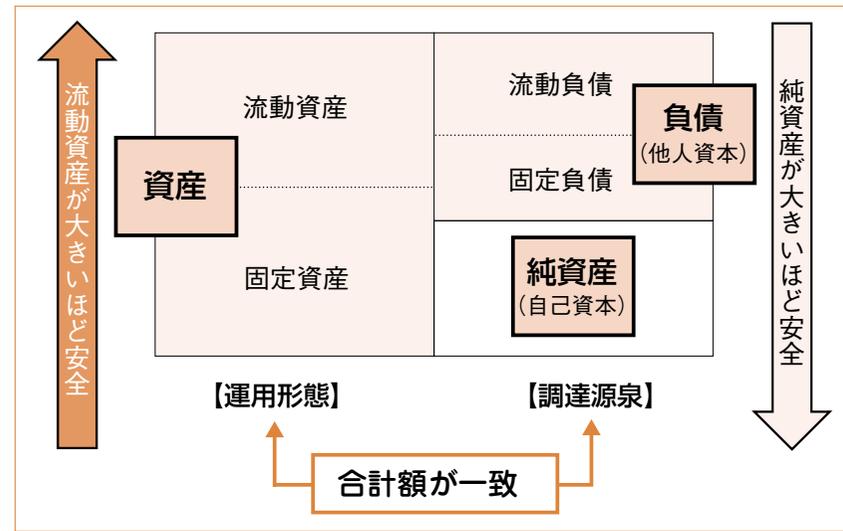
B/S・P/L・CF計算書のココに着目する！

主な決算書の見方と実態把握のための分析方法

中原裕之 中小企業診断士

ここでは、決算書の概要と受け取った際に確認したい分析ポイントを紹介します。

図表1 貸借対照表の基本



図表2 貸借対照表の例

貸借対照表
自 平成X年4月1日 至 平成Y年3月31日
(単位:〇万円)

資産の部		負債および純資産の部	
科目	金額	科目	金額
流動資産	15,000	流動負債	13,000
現金	3,000	支払手形	4,000
受取手形	4,000	買掛金	5,000
売掛金	3,000	未払金・未払費用	2,000
有価証券	2,000	その他	2,000
棚卸資産	1,000	固定負債	8,000
その他	2,000	長期借入金	4,000
固定資産	22,000	その他	4,000
有形固定資産	6,900	負債合計	21,000
建物・構築物	2,000	株主資本	16,000
機械装置	2,000	資本金	3,000
土地	1,100	資本剰余金	5,000
その他	1,800	利益剰余金	8,000
無形固定資産	100		
投資等	15,000	評価・換算差額等	0
投資有価証券	12,500		
その他	2,500	純資産合計	16,000
資産合計	37,000	負債・純資産合計	37,000

払う必要がある「流動負債」と、現金化されるのが流動負債よりも後である「固定負債」で構成されます。流動負債は現金化されやすい順に、支払手形、買掛金、未払金・未払費用などがあり、固定負債は長期借入金、社債などがあります。

最後に純資産は、資本金、資本剰余金、利益剰余金があり、一番現金化されにくいものとなっています。この純資産が大きいほど、その企業は財務的には安全といえます。

**固定資産と純資産を
まず比べてみる**
では、貸借対照表を受け取ったら、どのように分析すればよいでしょうか。貸借対照表を左右で比べた全体の構造バランスで見ると、理想の形態としては、固定資産を純資産で賄う「固定資産入純資産」となります。この構造は、固定資産を完全に自己資金で賄っている状態であるため、強固な財務状況といえます。

しかし、巨額の設備を自己資金（純資産）で賄っている企業は、特に中小企業においてはかなり少ないのが現状です。そもそもこの状態のままだと、借入金を必要としないため、融資は必要ないということになります。そこで、現実には、1年以上返済する必要がなく、流動負債より余裕のあるお金である固定負債を加えて、「固定資産入純資産+固定負債」となっているかチェックするのがよいでしょう。最悪な形態としては、固定資産が純資産・固定負債では賄いきれず、流動負債まで影響している「固定資産V純資産+固定負債」という構造です。この場合は、資金繰りがかなり厳しく、企業がかなり危ない状況を示します。さら

STUDY① 貸借対照表(B/S)
企業が作成する必要がある書類は、数種類存在します。その中で基本となる3つの決算書として、貸借対照表(B/S)、損益計算書(P/L)、キャッシュフロー(CF)計算書があります。この3つの決

算書を読むことが、企業の実態把握の出発点といえます。各決算書をひとりでいうなら、貸借対照表は財政状態を報告する計算書、損益計算書は企業の経営活動状況を示すもの、そしてキャッシュフロー計算書は企業のキャ

ッシュの状況を示す計算書です。時間軸で考えると、貸借対照表は、ある時点での財務状態を表すのに対し、損益計算書、キャッシュフロー計算書は1事業期間を評価したものです。以下でポイントを見ていきましょう。



貸借対照表は、「Balance Sheet (バランス・シート B/S)」とも呼ばれています。企業の一定の時点(決算時点)の財政状態を報告する計算書で、1年間の経営活動の結果として残った財産の内訳を表します(図表1)。

流動資産は、現金化しやすい順に、現金・預金、受取手形、売掛金、有価証券、棚卸資産などがあります。固定資産は、有形固定資産(建物・構築物、機械装置、土

地など)、無形固定資産(のれん代、商標権)、投資等その他資産(投資有価証券ほか)で構成されます。現金化しやすく、緊急時に対応しやすい流動資産が多いほど、財務的には安全といえるでしょう。右側の資本は、金融機関などに返す必要がある他人資本である「負債」と、返す必要がない自己資本を指す「純資産」で構成されています。負債は、決算から1年以内に支

純資産・固定負債と固定資産を比べて財務の安定性を把握する